

三五塵点に関する一考察―五百億塵点劫実説について―

野坂教翁

問題の所在

本論文は「三千塵点」および「五百塵点」に関する諸問題、特に日隆聖人の五百塵点実説論に関する問題について考察するものである。

日隆聖人が提唱した五百塵点実説論では、釈尊・上行同体による無始無終の仏身観から、有始である五百塵点以前には別の「無量の五百塵点」が存在するとされる。一方近年の研究では「有有限数である五百塵点の繰返しは無限とならず矛盾する」との指摘がなされる等、実説論に対して否定的な見解も散見される。本稿ではまず日蓮聖人および日隆聖人における五百塵点解釈を少しく確認した上で、五百塵点実説論の論拠並びに「有始の五百塵点と無始無終」の時間概念の整合性について一考を加えたいと思う。そのためここでは三五塵点説に関する基本的な理解を整理した上で、本稿の焦点を示しておきたい。

まずは三五塵点説の概略を見ておこう。法華経には釈尊の因位と果位の時間を表す「三千塵点」および「五百塵点」という術語がある。これらは三千塵点劫、五百億塵点劫という時間のことであり、合わせて三五塵点とも呼ばれる。三千塵点は法華経の化城喻品に説かれ、釈尊の因位即ち菩薩行の時間である。また五百塵点は法華経

の如来寿量品に説かれており、久遠本仏が菩薩道を修行して成道した過去世の時間である。特に五百塵点は久遠本仏の因果所修の時間であつて特に重要であると考えられる。

この三五塵点の法門は爾前諸經に説かれないため、爾前諸經に対する法華經の超勝性を示すものとして重要とされる。即ち妙樂大師は『法華文句記』に、

況や迹の化三千墨点を挙。本成は五百微塵に喩。本迹事希にして諸經に説かず。^①

として、大通覆講即ち釈迦如来による三千塵点劫の過去世からの化道、および久遠本仏の五百億塵点劫の過去世の成道が法華經には説かれていて、これら三五塵点の事は諸經に説かれていない、と記されている。このことから天台宗において三五塵点は爾前諸經に対する法華經の超勝性として重要視されてきた。

他方、日蓮聖人においてもこの三五塵点を重要視する立場は同じであるといえる。即ち、三五塵点およびこれに類する名目は真蹟に限らず、多数の御遺文に見られている。一例を挙げると『法華取要抄』には、

今法華經と諸經とを相對するに一代に超過すること廿種之れ有り。其中最要二つ有り。所謂三五の二法也。^②

として、法華經には諸經と相對した時に超過する点として二十の法門があり、その中の最も重要な二法が三五塵点である、と記されている。このことから日蓮聖人においても妙樂大師と同じ立場であり、諸經に対する法華經の超勝性として三五塵点を重要視されていることがわかる。

では、この三五塵点説における仮説論と実説論の違いとは、如何なる点に求められるのであろうか。それは概ね以下のように理解されるものである。

日蓮聖人滅後多くの門流が形成される中、日蓮門下でも本迹一致・勝劣など法華經解釈の違いから異なる考え方を持つ門流が現れるようになり、日蓮聖人の頃には当時の密教化した天台教学の影響を受けて中古天台思想が

門下に広まった。これは法身正意の仏身觀のもと、究極的には凡夫即仏を主張するもので、五百塵点という本仏の因果所修の時間は仮説即ち方便とみなす立場である。

これに対して日隆聖人は、修行を不要とするこの三五塵点の仮説論を強く批判した。そして報身正意の立場から、久遠本仏が菩薩道を修行した五百億塵点劫は実説であると強調されたのである。『法華天台兩宗勝劣抄』（以下『四帖抄』）に、

三五塵点をば、天台宗には、塵数へと云つて仮説と云うなり。…（筆者注…以下、引用）
（著による中略を表す）この三五仮説ならば、本迹の法門も仮説か。…久遠成道の法門も仮説か、無用か。³

として、当時の天台宗は三五塵点を仮説として、更に三五塵点が仮説ならば、本迹ひいては久遠成道も仮説か、と天台宗を強く批判していることがわかる。

近年、こうした日隆聖人における五百塵点実説論に対して、矛盾が生じるのではないかとの指摘がなされている。即ち、報身である久遠本仏が菩薩道を修行した当初が想定されるので、五百塵点は有限の数となる、と考えるものである。そしてその場合、有限数を繰り返しても無限にはならず、結局無始無終と背反するのではないかと指摘している。一方で、これらの批判に対して反論もなされており、問題無しとはされていないようである。浅学非才の身ながら、本稿にて一考を試みたいのは、こうした問題についてである。

第一章 日蓮聖人遺文における三五塵点

第一節 三五塵点の概念の分類

日蓮聖人遺文において、三五塵点は「三五の二法」「三五遠化」などとも記述され、『観心本尊抄』『法華取要抄』『曾谷入道殿許御書』『開目抄』『法蓮抄』『兄弟抄』など多くの御遺文に見られ、また五百塵点の語だけでも『観心本尊抄』『法華取要抄』『報恩抄』『忘持経事』『聖人知三世時』『法蓮抄』他、多数の御遺文に見られる。先行研究でも述べられているところであるが、日蓮聖人はこの三五塵点の語を、①法華経の超勝性、②衆生教化における下種、③謗法罪による流転の時間、④釈尊の因位・果位として用いられていることがわかる。以下、これらの分類に関する代表的な事例について概観する。

①法華経の超勝性

法華経には大通覆講即ち釈迦如来による三千塵点劫の過去世からの化道、および久遠本仏の五百億塵点劫の過去世の成道が説かれていて、これら三五塵点の譬えは爾前諸経に説かれていない。そのため、諸経に対する法華経の超勝性、即ち法華最第一を示す最要の法門として三五塵点は重要視されている。御遺文に示されるそれらの事例を以下に挙げておく。

『法華取要抄』

今法華経と諸経とを相對するに一代に超過すること廿種之れ有り。其中最要二つ有り。所謂三五の二法也。⁵⁾

『兄弟抄』

法華経と彼経経とを引せ合て之見るに勝劣天地也、…別して経文に入て此を見奉れば二十の大事あり。第一

第二の大事は三千塵点劫、五百塵点劫と申す二つの法門也。⁽⁶⁾

②衆生教化における下種

積尊による衆生教化は種熟脱の三益として展開するが、その化導の始まり、即ち下種が三五塵点の過去にあるとする事例が以下のように示されている。

『観心本尊抄』

夫れ以れば釈迦如来の一代顕密大小二教華嚴真言等諸宗依経往て之を勘ふるに或は十方台葉毘盧遮那仏・大集雲集の諸仏如来・般若染浄千仏示現・大日金剛頂等千二百尊但だ其近因近果を演説して不顯其遠因果。速疾頓成之を説けども三五の遠化を亡失し化道の始終跡を削りて見え⁽⁷⁾ず。

『曾谷入道殿許御書』

問て日く華嚴之時別円の大菩薩乃至観経之諸の凡夫の得道は如何。答て日く彼等の衆は時を以て之を論ずれば其経の得道に似たれども実を以て之を勘るに三五下種の輩也⁽⁸⁾。

③謗法罪による流転の時間

衆生が三五塵点の時間を經歷するのは、法華経の下種を退転すること即ち謗法による罪業であるとするもの。中でも『春初御消息』では入滅間際の日蓮聖人は読経もままならないことから来世において自身が三五塵点を経たしてしまうことを嘆いており、日蓮聖人自身が謗法罪による流転を意識されていたものと推察できる。こうした内容については、以下の御遺文に確認できる。

『南條兵衛七郎殿御書』

大通結縁の者の三千塵点劫を、久遠下種の者の五百塵点を経し事、大悪知識にあいて法華経をすてて念仏等

三五塵点に関する一考察―五百億塵点劫実説について―（野坂教翁）

の權教にうつりし故也⁽⁹⁾

『開目抄』

久遠大通の者の三五の塵をふる、悪知識に値ゆへなり。善に付け悪につけ法華經をすつる、地獄の業なるべし⁽¹⁰⁾

『兄弟抄』

舍利弗・目連等が三五の塵点劫を経しことは十悪五逆の罪にもあらず：法華經の信心をやぶりて權經にうつりしゆへなり⁽¹¹⁾

『春初御消息』

すでに読經のこえもたえ、觀念の心もうすし。今生退轉して未來三五を経事をなげき候つるところに、此御とぶらひに命いきて又もや見參に入候はんずらんとうれしく候⁽¹²⁾

④ 釈尊の因位・果位

教主釈尊は五百塵点の過去世にて菩薩道を行じて成道したのであるが、その因行果徳について『觀心本尊抄』『法華取要抄』などに三五塵点の語を用いて述べられている。なお、五百塵点過去世の因行とは報身仏の因行である。

『觀心本尊抄』

教主釈尊は始成正覺の仏也。過去の因行を尋ね求めば：或は三千塵点等之間 七万五千・六千・七千等之仏供養し 劫を積み行満して今教主釈尊に成りたまふ⁽¹³⁾

教主釈尊は五百塵点已前の仏也。因位も又是の如し。其れ自り已來十方世界に分身し一代聖教を演説して塵

数の衆生を教化したまふ¹⁴

『法華取要抄』

此土の我等衆生は五百塵点劫より已來教主釈尊の愛子也。不孝の失に依て今覺知せずと雖も他方の衆生には似るべからず¹⁵

以上、御遺文に見られる三五塵点の語を、先行研究に基づき①～④に分類しながら確認してきた。これらは三五塵点を論ずる際、たびたび言及された問題といえよう。

第二節 日蓮聖人による三身の寿命の説示

次に仏の三身の寿命について、日蓮聖人が御遺文にどのように示しておられるのかを確認しておきたい。五百塵点を論じる上で仏の三身とその寿命について押さえておく必要がある。

日蓮聖人遺文を見ると、初期では三身即一や報身正意について積極的には述べられてはいない。『守護国家論』では、報身の説く華嚴経と応身の説く法華経との勝劣の問題に対して「四十余年未顕真実」、「已今当三説超過」の文を法華経最勝の根拠とし、三身即一に関しては言及していない。また『船守彌三郎許御書』では、教主釈尊の実体は法界の成仏、即ち法身仏としているのである。

『守護国家論』

問て云く諸宗の学者難じて云く華嚴経は報身如来の所説七処八会皆頓極頓証之法門なり。法華経は応身如来の所説教主既に優劣有り。法門に於いて何ぞ浅深無らん。…答えて云く法華経の行者は心中に四十余年・已今当・皆是真実・依法不依人等の文を存して、しかも外に語に之を出さず¹⁶

三五塵点に関する一考察―五百億塵点劫実説について―（野坂教翁）

『船守彌三郎許御書』

過去久遠五百塵点のそのかみ唯我一人の教主釈尊とは我等衆生の事なり。…一念三千の佛と申は法界の成佛と云う事にて候ぞ¹⁷⁾

だが時を經るにつれ、日蓮聖人の仏身觀は三身即一の久遠本仏であり三身のうちでは報身正意へと進展していくのである。『法華真言勝劣事』では、久遠本仏と大日如来との勝劣に關し、法身仏・無始無終である大日如来に對して久遠本仏は三身の無始無終であつて諸經に説かない、と述べられている。即ち久遠本仏は三身即一であり、更に法華經の説く五百塵点は無始無終と考えられていたことも看取できる。

『法華真言勝劣事』

問て云く大日經の疏に云く大日如来は無始無終なりと。遙に五百塵点に勝れたり。如何。答ふ：諸大乘經に之を説く。独り大日經のみに非ず。問て云く若爾らば五百塵点は際限有れば有始有終也。無始無終は際限無し。然れば則法華經は諸經に破せ被るるか如何。答て云く：今大日經並に諸大乘經の無始無終は法身の無始無終也。三身の無始無終に非ず。法華經の五百塵点は諸大乘經の破せざる伽耶の始成之を破したる五百塵点也¹⁸⁾

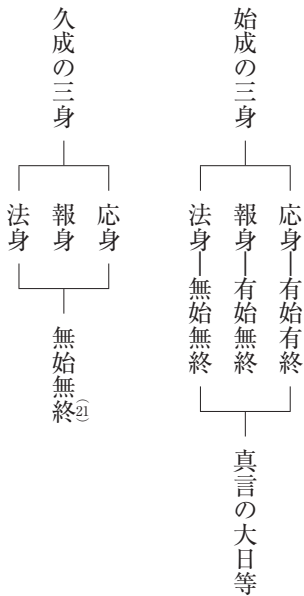
また『開目抄』では、応身報身の顯本は法華經でのみ説くと述べており、報身を正意としていることは明らかである。

『開目抄』

其外の法華前後の諸大乘經に一字一句もなく、法身の無始無終はとげども応身報身の顯本はとかれず¹⁹⁾久遠本仏が三身即一・報身正意である理由を述べると、一点目として上冥下契が挙げられる。報身仏による自

行があつて初めて、法身である真理に到達することが可能であり、応身となつて示現することで初めて衆生を教化することができる。もし報身仏が三身の主体でなければ、換言すればもし法身が三身の主体であれば、真理は真理のままであつて応身が示現することも無い。報身を実体として三身を具足するからこそ三世に亘る衆生教化が可能である。二点目として自行の成道がある。寿量品の文「我実に成仏してより已来た久遠なること斯の如し」より、仏は久遠本時に成道した、と説かれている。この文から報身仏が主体であり法身に境智冥合したと考へるべきである。もし法身が主体であればそもそもこの成道自体が不要であるので本地の開顯、寿量品自体が方便と見做されることとなる。よつて法身正意ではなく報身正意といえるのである。²⁰⁾

一方、久遠本仏における三身の寿命については『一代五時鷄図』にて全て無始無終と明記している。後述する図を見れば明らかであるが、始成正覚の仏の三身において応身・報身は有始であるが、久遠本仏の三身において三身ともに無始無終となる。



この久成三身の実体についていえば、法身は真如、報身は智慧、応身は慈悲が実体となる。法身は因果や時間を超越しているため、厳密に言えば非寿であり非始非終といえる。報身は成道して境智一体となったときに無量の寿命を獲得するのであり、応身は三世に亘り生滅を繰り返すため応現した仏は有限の寿命であるが、実体である報身が有する慈悲は常住であるから、三身の寿命は無始無終となるのである。⁽²²⁾

また『観心本尊抄』には、

我等が己心の積尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏也。⁽²³⁾

として、五百塵点の過去世にて顕されるところの三身は無始の古仏である、と述べられていて仏の三身の寿命を無始無終と見ていることが確認できる。但しこの文の解釈は研究者によって意見が分かれるところである。

例えば株橋日涌先生は、

・五百塵点は始めと終わりを持つ時間であって文中の「乃至」は五百塵点以前の「無量の五百塵点」を省略したものであるので、三身を具足する仏はこの無量の五百塵点により無始無終となる。⁽²⁴⁾

と説いている。他方で、北川前肇氏は次のように述べている。

・五百塵点は始めと終わりを持たない非数の譬えであって時間的因果関係を超越した無始久遠であるので、凡夫の己心に具足する積尊とは三身を具足した無始無終の仏である。⁽²⁵⁾

このように、この文の解釈は論者によって違いが見受けられるが、どちらも仏の三身の寿命を無始無終と見ることに変わりはない。

以上まとめると、日蓮聖人の御遺文においては、四種の三五塵点の概念があること（①法華経の超勝性、②衆生教化における下種、③誘法による罪業、④積尊の因位・果位）、および久遠本仏の実体は報身仏であり、その寿命は

無始無終と示されていることが確認できた。

第二章 五百塵点実説論に対する先行研究

第一節 株橋日涌先生の所見

今節では日隆聖人の五百塵点実説論について、当宗では塵点義をどのように解釈しているかを確認したい。先行研究としては株橋日涌（諦秀）先生がその著述である『観心本尊鈔講義』、ならびに先生の論文である「日隆聖人の寿量本佛観」にてその要点をまとめられているので、そちらを参考に確認したいと思う。

塵点解釈を確認するにあたり、まずは中古天台における五百塵点の義を確認しておく。これは株橋日涌先生の『観心本尊鈔講義』にて日隆聖人の文を引用しつつ述べられている。概略を述べれば、

中古天台の義では本門顕本において事理の二顕本を説いてその取捨を論ずる。いはゆる事顕本とは五百塵点劫の当初に成道せる久遠の釈尊を顕本することであり、理顕本とは久遠成道の釈尊を顕本するのではなく、法界の森羅万象悉くそのまま無作三身の覚体なりと顕本することである。²⁶⁾

として、中古天台では顕本に事理を立てて取捨を論じ、事顕本として五百塵点過去世の久遠本仏を、理顕本として法界の真理そのものが無作三身の体である、とする。即ち、『私新抄』の「三五塵点仮説実説中何耶」における文を引用し、

中古天台においては、五百塵点は実は五住煩惱で「もとのまま」なる自然本覚の無作三身の義を知らざる者の為に仮説されたもの、従って之によって顕本された仏は結句有始有終の有為の報仏に過ぎない。…之にひ

きかえ理顕本の方法の事々即自然本覚の無作三身の覚体は独朗円明にして、本地の風光、機の為に説かざる
仏意の内証²⁷⁾

として、中古天台では五百塵点の譬えとは無作三身を知らない機根に対する仮説であり、よって事顕本の報身仏
は有始有終であるが、理顕本である法界の無作三身の体こそが独り完全であって仏の内証である、という。更に
『開迹顕本宗要集』の「事理顕本の中には何れを以て本意と為すやの事」における文を引用し、

中古天台にては五百塵点の仮説顕本は事成顕本にして…真実の顕本ではなく、真実の顕本は理成顕本にして
…これ如来秘密（内証）の本覚無作の三身にして法界遍照の本理の三千であると示し、…中古天台において
は五百塵点は無作の時間、故にこれによって顕はるる仏は迹門始覚の仏、如来の内証、法界遍照三千依正宛
然の本有の仏は本覚無作の三身であるといふのである。⁽²⁸⁾

として、中古天台では五百塵点による久遠の顕本は有限の時間であって迹門・始成正覚の仏で真実ではないとし、
真実の顕本は理顕本であって法界を悉く照らすその法体とは本覚無作三身である、としている。

以上より中古天台義とは、五百塵点の譬えは低い機根に対する仮説に過ぎず、久遠に成道した報身仏は有始有
終の仏で真の顕本ではないこと、真の顕本は仏の内証である本覚無作三身、法界の真理そのものが仏であること
なすこと、であると言える。

次に当宗における五百塵点の義について確認したい。これは特に株橋日涌先生の論文である「日隆聖人の寿量
本仏観」にその要点をまとめられている。まず五百塵点実説・仮説について、

寿量品には本仏積尊の久遠成道を顕すに五百塵点の譬説を挙げてあるが、隆師はこの譬説に於て、中古天台
の五百塵点仮説論を排して五百塵点実説論を立てている。⁽²⁹⁾

として実説の立場であることは言うまでもない。

仏の三身について正意は奈辺にあるかについて、前述した中古天台の義では法身が正意であることは明らかであるが、実説論においては正在報身即ち報身仏こそが正意であり、三身即一である久遠本仏の実体は成仏の手本即ち本尊となり得る報身であるとする。その理由として、

法身は果上の理仏なる故に因果なく、応身は化他の仏なる故に自行の因果はない。修因感果の衆生に応じて因円果滿せる仏は三身の中には報身でなければならない。故に報身本仏が我等衆生の成仏の手本即ち本尊となるのである。⁽³⁰⁾

として、法身の実体は真理そのものであるため成仏するための自行の因果はない。よって我々衆生にとつて成仏の手本とはなり得ない。自行の因果を持つ報身こそが本尊となり得るのである、と述べられている。

では報身仏は修行して仏になったというが、それはどのような菩薩行を行じて成道したかという点、

この報身本仏は久遠本時に如何なる教法を受持し如何なる修行をなされたか、それはいうまでもなく妙法蓮華經の受持・口唱・弘通の信行觀であつて…本仏釈尊の身相は我等が如き凡夫にして名字信位に居して自ら妙法蓮華經を信行し、また他の衆生に対して妙法を口唱し弘通せられた⁽³¹⁾

として、報身仏の菩薩行とは妙法蓮華經の信行、即ち題目の聞信口唱であるとする。

報身仏が題目を聞信口唱するためには題目を聞かせる師がいなくてはならない。その師とは誰かという点と釈尊自身なのである。株橋日涌先生は『法華宗本門弘經抄』から次のような一節を引用した上で、このことについて以下のように示している。

依て釈尊即ち前仏の本涅槃妙滅後末法の時、我等が如く凡夫にて初めて本因妙名字即の信位に居して觀妙を

修し下種を成じ、弟子上行等に仏種を下す此れを久遠下種と云ふ³²⁾

として、前仏である釈尊が本涅槃妙の時、弟子である上行は名字即の位であり、観妙即ち題目の聞信口唱を修することによって仏種を受けるとし、これを久遠下種という、と述べられている。よって報身仏は上行である、ということになる。

更に、この師弟である釈尊・上行は一体（一仏二名）であるという。

釈尊・上行は一体にして、その本果の辺を釈尊といい、本因の面を上行というのみで、釈尊と上行は異体ではない。∴自行の面に於ては両者は一体であり、覚他の面に於ては両者は異体にして師弟の關係にある³³⁾

として、本因即ち修行を行っている報身仏を上行菩薩と言ひ、本果即ち仏果を得た報身仏を本仏釈尊と言うのであつて、実は釈尊・上行は一体である、とする。その理由として挙げられているのは、『法華宗本門弘経抄』からの次の引用である。

本果の仏界より本因上行等の九界を出生して、而も九界仏界師弟同体にして、釈尊体具の本因妙上行九法界は、自性所生本有の支分、本来自性の菩薩界なり。故に一体同体の因果、父子師弟にして更に別体にあらざるなり。³⁴⁾

この引用文によると、本果釈尊は十界を具足した仏であり、本因上行を代表とする九界は釈尊の自性、即ち本来具えている性質であつて別体ではない。よつて釈尊・上行は一体とされる。以上、実説論における報身仏の本因本果について確認した。

次に塵点の解釈について確認したい。中古天台義では、五百塵点の当初がある報身仏は有始有終の仏であるので五百塵点の喩えは仮説であり正意ではないとしたのであるが、当宗の解釈では、

隆師は：経文の五百塵点は報身本仏の実際に修行せられた歴史的経過時間にして、経には単に一ケの五百塵点を挙げているが、実はこれに無量無辺の五百塵点ありとし、これを以て報身如来の無始久遠なることを実証せられている。³⁵⁾

として、五百塵点の前に無数の五百塵点が存在するので報身仏は無始無終であるとする。何故無数の五百塵点が存在するかというと、それは師弟であるところの本果妙積尊と本因妙上行が一体であり、自行の因果であるからである。即ち、

五百塵点の前に五百塵点があり、本仏積尊の前に前仏積尊があつて無限の過去に遡つてゆく、而もこの無数の五百塵点を釈迦一仏の因果とすれば本仏積尊の修行は実に無始無終の久遠に亘るのである。³⁶⁾

として、五百塵点劫の過去世に亘つて聞信口唱の修行を行う本仏積尊の師は、前仏である本仏積尊であり、この前仏も五百塵点劫の過去世に亘つて修行を行うので、更にその師：と無数に存在するのであり、しかもそれは積尊一仏の因果であるので無始無終となるのである。

これまで見てきた日隆聖人の五百塵点実説論についてまとめると以下のようになる。

①真理である法身に自行の因果はないので衆生の成仏の手本にはならず、久遠本仏の実体として本尊となり得る報身仏こそが正意である。

②報身仏は菩薩行を行つて成仏したが、その菩薩行とは題目の聞信口唱である。この菩薩行の時間を譬えるものが五百塵点である。

③報身仏が題目を聞信するには師が必要である。その師とは久遠本仏である。一方、報身仏と久遠本仏とは一体であつて、この報身仏を本因上行、久遠本仏を本果積尊と言うのみである。

④ 一体の釈尊・上行によって自行の因果（菩薩行）が無数に繰り返されることとなる。よって五百塵点の前に無数の五百塵点が存在しているので報身仏は無始無終となる。

以上より、株橋日涌先生の所見に基づきながら、当宗における塵点解釈を確認してきた。次節では、こうした見解に対する批判を確認していきたい。

第二節 五百塵点実説論に対する批判

前節では日隆聖人の五百塵点実説論について、株橋日涌先生の所見に基づきながら、八品門流の解釈を見てきた。そこで確認できたことは、久遠本仏は衆生の手本となる報身仏こそが正意であること、この報身仏である上行には師である釈尊が存在して釈尊・上行は一体であること、この釈尊・上行の自行の因果が無数に繰り返されること、よって五百塵点の前に無数の五百塵点が存在することにより報身仏は無始無終となることである。

こうした日隆聖人の五百塵点実説論に対し、所謂「繰返し顕本」であるとの指摘がある。この指摘をさしている先師としては望月歎厚氏、執行海秀氏、北川前肇氏などが挙げられる。

望月歎厚「日隆聖人の顕本論について」では、『私新抄』に、

チリチリ常住サクサク常住ト云ガ如シ、今経ノ報身ノ本因妙ノ始モ、イツモ始メイツモ始メニシテ断絶無キ本因妙ノ始也³⁷

とある断絶無キ本因妙を引用して、

無始無終の何れの一点を捕へて初めとするも終わりとするも常住本覚裏の一影に過ぎずとするものにして、有始と云ふも定まれる一時の始めなりといふにあらざるが如し。…五百塵点実数は師の常住の有始なる説明

と両立し得なくなつた。若し師の有始を文言のまま通途に解釈し去れば五百の実数とは能く合致するが同時に有始と本覚とは永久に一致しない難が生ずる。³⁸

として、無始無終のある一点を初めに、ある一点を終わりにしても所詮は常住の一部分に過ぎず、有始の五百塵点と言つても定まつた始めであるとは言えないという。更に、五百塵点実説とすると有始と本覚とは永久に一致しない、即ち報身仏において有始の五百塵点と無始無終の寿命が矛盾するとの指摘がなされている。

執行海秀「初期宗学思想史上に於ける日隆上人の宗学」も同様に、

即ち師は：五百塵点繰返の常住論を主張しているのである。³⁹

と評し、日隆聖人の顕本論は有限数を繰り返す「繰返し顕本」であると指摘している。

また北川前肇「慶林院日隆の顕本論について」でも同様の立場であつて、

報身仏には最初本因妙の久遠有始が想定され、譬喩の五百塵点を実説と見做した結果、久遠最初の本因妙下種に拘泥した繰返し顕本義に陥つたと思われる。⁴⁰

と述べ、更に同「慶林院日隆の顕本論（一）」では、

五百塵点当初の修因を措定することが、修因感果の報身仏にとつて欠くべからざるものと考えられているが、はたしてそうであろうか。：報身仏の当初に修因を想定することは、いつも五百塵点の当初という概念と分離のものとなつて、やはり繰返し顕本の顕本と成らざるを得ないのではないだろうか。⁴¹

として、五百塵点実説論は報身仏の当初に修因があるために繰返し顕本義に陥るのではないか、と否定的な見方をされている。

一方「日蓮教学における時間論の展開」では、日蓮聖人の「五百塵点乃至所顕三身無始古仏」の文を引いて、

五百億塵点劫を、はじめがあり、終わりがあるという時間概念で捉えられていたのではなく、「久遠無始」と解釈すべきもののようである。⁽¹²⁾

として五百塵点を、始めも終わりも無い時間概念を持たないものと捉えるべきではないかとしている。即ち五百塵点は数量ではなく無始無終、無限の譬喩であつて、報身仏は久遠無始において成道した、と主張されていると考へる。

以上より、批判の内容は以下のように整理できると思われる。

・久遠本仏が報身正意であると菩薩道を修行した始めがあるので五百塵点は有限数つまり有始となる。そうすると無始無終の報身仏という概念と背反することとなる。

・仮に無始無終の中のある一部分を始めと終わりと規定しても結局は常住の一部分に過ぎず、無始無終とはならない。よつて報身仏において有始の五百塵点と無始無終の寿命が矛盾する、という主張である。

・更に日隆聖人の著述に見られる、五百塵点の前に無数の五百塵点が存在することにより報身仏は無始無終となるとの文に対して「繰返し頭本」として批判している。これは五百塵点という有限数の繰返しとなつて無限にはならず、結局無始無終とは言えないとの主張であると推察する。

以上見てきたように、有始である五百億塵点劫と無始無終の報身仏についての論理的整合性が一つの問題として注目されていることが分かる。

第三節 五百塵点実説批判に対する反論

前節で見てきた五百塵点実説への問題指摘に対し、反論を試みたものとしては、石田智清「日隆聖人研究ノ一

ト(一)五百塵点について、芹沢一男「慶林坊日隆の時間論—五百塵点実説論について—」、大平宏龍『日蓮教
学の大綱—名目を考える—(五)』等がある。ここでは「繰返し顕本」の批判に対して反論した石田論文を主と
して確認する。まず、実説と仮説の意について述べられている。

実説は仮説を排するものではないが、仮説を排する実説は、自体譬説であることを否定するものではない。⁽⁴³⁾
として、まず実説は譬喩を否定するものではないとする。そして中古天台思想の仮説論に対し、

非因非果の理であるから、能譬の五百塵点は：非数とされねばならぬ。従つて、譬喩自体も又何等の明瞭性
を有せざる觀念であり、：能譬と所譬は、何等の演繹性、又帰納的關係にあるものでもなく、何等の必然性
も蓋然性もない。⁽⁴⁴⁾

として仮説の立場では、譬えるべき法身は因果が無いので、譬えである五百塵点は数ではない。つまりもはや五
百塵点は譬えではなく、譬えに何の關係性も持たないとする。その一方で実説論では、

五百塵点は文の如く、この報仏の因果の時間の事実として解得されているのである。：隆師の実説という意
は、能譬の五百塵点は、所譬の報身の根本的属性、報身所具の事実であり、能譬と所譬は、直積的、帰納的、
必然的な積極的關係下にあるものといひ得る。⁽⁴⁵⁾

として譬えである五百塵点は、報身仏の因果の時間を事実として譬えたもので、必然的な關係性があるとして、
実説では五百塵点の譬喩を、ある必然的を持つものとして考えるべきだと示唆されている。

次に無量の五百塵点を「繰返し顕本」と批判されている点に関する反論は、次のように述べられている。

斎限無き、又は無量無辺の五百塵点という辺の思惟は、一往先の直線的進行的問いの思惟と同一直線上の思
惟ではあるが、これを「ツカネテ一ケノ」とする思惟は、彼と同一直線上のものとはなし得ない。⁽⁴⁶⁾

として、まず無量の五百塵点とは直線的、同一直線上ではないとする。それはどういうことかというところ、

無量の五百塵点を通じて、本因本果という関係が等しい、無量の五百塵点には、共通の内包本因本果が存する、という事なのである。…その因果という具体的相対性を、五百という数の事実によって譬顕し、…根源的絶対的無始なる久遠性をば、塵数によつて譬顕したとされているのである。⁽⁴⁷⁾

として、共通の事実である本因本果を内包する無量の五百塵点であると述べられている。そして因果の事実を五百で顕し、久遠性を塵点で顕したとする。即ち、無量の五百塵点には本因本果という共通の事実が含まれていて、これを具体的に譬喩されたものであるとの示唆である。よつて単に「繰返し」と記述するには次元的に異なることを述べられているものと推察する。

では何故「ツカネテ一ケ」の表現となるかと言つと、それは前章で述べた株橋日涌先生の所見と同じである。即ち列挙すれば、

報身は必ず修因感果を網格とし、無師独悟を排する故に、因の本初即ち五百塵点の当初において信行の修因がなければならぬ。…修因は聞唱の信でなければならず、聞唱の信は必ず唱授の師がなければ下種として成立し得ぬ故、聞唱の修因のところに必ず唱授の師が果の形において在りとされねばならない。…この受授を因果として捉え、この因果は五百塵点の当初に、常に在らねばならぬ因果であるから、これを能譬する五百塵点は、常に、従つて「いつも」即ち無量の五百塵点とされねばならず、又この因果は常に南無妙法蓮華經の唱授であり、聞受であるから、無量の五百塵点によつて能顕される、無量のこの因果を貫ぬく、因果の自己同一性の故に、無量の五百塵点を一箇の五百塵点、一箇の本因本果によつて顕し得るのである。…五百塵点を実説としつつ久遠であるのは、本因本果の自己同一性により、本因本果の自己同一を久遠というので

ある。⁽⁴⁸⁾

として、信行の修因を持つ報身仏、即ち上行には師である釈尊が存在して下種が行われ、この釈尊・上行による自己同一の因果が無数に存在するため、譬えられる五百塵点にも無数の五百塵点が存在するので報身仏は無始無終となると言えるのである。

更に石田論文では、本因妙の一時は無量の五百塵点を収斂した一時であるため、自己同一ではあるが同じ一時を繰り返すことはなく螺旋的三世との説示もなされている。⁽⁴⁹⁾

以上見てきたところでは、無量の五百塵点とは単に「繰返し」と記述するには次元的に異なっており、共通である事実、即ち自行の因果を内包するものであると述べられている。そして五百塵点の譬えとは、これを具体的に譬喩されたものという事ができよう。

別の面からの反論として、大平宏龍『日蓮教学の大綱』がある。⁽⁵⁰⁾これを要約すると、
①日蓮聖人自身が『一代五時鷄図』にて、久成三身共に「無始無終」でありながら「実修実証の仏」と記述されていることから、報身仏を実修実証であり無始無終と見做していたということ。

②第一章で述べたように日蓮聖人には四種の三五塵点の概念があるが、その中には「久遠過去世の三五塵点」と「未来世において流転する三五塵点」という、複数の三五塵点が確認できること。

以上の点から、「無量無辺の五百塵点」は日蓮聖人の考えの中にも存在していたのではないかとの指摘があり、日蓮聖人の主張は日蓮聖人の考えに即したものであったと主張されている。

一方で「五百塵点と無始無終」の問題、言い換えれば「実修実証の仏と無始無終」の問題は日蓮聖人の教学の問題に限定されるものではなく、実は仏教全般における問題の一つとして捉えられてきた。即ち田村芳朗「親鸞、

日蓮両師における久遠仏思想の対比」によれば、

彼（日蓮聖人・筆者注）の解釈する久遠は無始で、しかも理体本覚法身の無始無終ではなく、実修実証の具
体性を有する事仏であるととれよう。…実修実証は先にもみたごとく、有限性を示すことは否定できないの
であり、修行し悟りを開いて仏になることであるから、その仏は無始ではありえない。したがって実修実証
と無始とをいかに結びつけるか。これが日蓮に投ぜられる第一の疑問となるのである。⁽⁵¹⁾

と、日蓮聖人が考える久遠本仏とは法身ではなく実際に修行した報身仏であるとした上で、実修実証の仏は有限
であり始めが想定されるので無始ではあり得ないとされている。更に、

仏教において久遠仏を立てるということが、極めて難問題であって…共通問題として、まずこれを解明する
要があることを思うのである。⁽⁵²⁾

として、久遠仏を立てる場合すべてにおいて難しい問題である、とされている。以上から、有始である五百塵点
と無限と捉えられる無始無終との関係性には様々な見解があり、論理的整合性には課題が残されているものと思
われる。

以上、管見の限りでは五百塵点実説に対する批判として、①「五百塵点」は有限数であって無始無終である報
身仏と矛盾する、②「無量の五百塵点」は有限数の「五百塵点」を繰り返す「繰返し顕本」に陥っている、③
「五百塵点」とは有限数ではなく無始無終の譬えと考えるべきである、という三点であると言える。

これに対する反論としては、②に対しては、日蓮聖人の文より「無量の五百塵点」とは次元の異なる五百塵点
であって直線的繰返しではないこと、①および③に対しては、日蓮聖人は御遺文で実修実証の報身仏ならびに

複数の五百塵点を示されていることから、日蓮聖人と日隆聖人は同じ立場であり、これらによって日隆聖人の五百塵点実説論の正当性を述べられている。つまり、日隆聖人の主張は日蓮聖人の考えに即したものであると言えよう。

一方で、有始である実修実証の仏と無限と捉えられる無始無終との関係性には様々な見解があり、論理的整合性には日蓮門下の教学の問題を超えた課題が残されているものとも考えられよう。

第三章 御聖教における五百塵点解釈

第一節 「無始の五百塵点」解釈

日隆聖人の「無始の五百塵点」解釈については、第二章の株橋日涌先生の先行研究で確認したところではあるが、ここでは改めて日隆聖人の著述を引用してどのように解釈されていたのかを確認していきたいと思う。

日隆聖人は報身仏の因果所修の時間である「有始の五百塵点」と報身の寿命である「無始の五百塵点」を具体的にどのように解釈されていたのかというと、『私新抄』には、報身仏の久遠無始が説明されている。即ち、

顕本報身ニ始ヲ論ズルコトハ本因本果ニ妙顕然也、因果所修ノ仏ニハ有始無終、此ノ始ノ本因妙復倍上数ノ無始無終久遠長寿ニシテ無量無辺ノ五百塵点劫也⁵³

として、報身仏の始めを考えると因果所修の仏は有始無終だが、更にその始めの本因妙を考えると無量無辺の五百億塵点劫の過去世であって無始無終である、と述べられている。更に、

今経ノ本門寿量品ノ五百塵点ハ斎限有ルニ似テ三世本有本來常住ノ五百塵点五百塵点ト断絶無ク顕本シ玉フ

三五塵点に関する一考察―五百億塵点劫実説について―（野坂教翁）

コト無量無辺ニシテ斎限無、斎限無無量無辺ノ五百塵点ヲツカネテ一ケノ五百塵点ト経ニハ説ケリ：チリチリ常住サクサク常住ト云ガ如シ、今経ノ報身ノ本因妙ノ始モ、イツモ始メイツモ始メニシテ断絶無キ本因妙ノ始也⁽⁵⁴⁾

として、際限の無い無量の五百億塵点劫があり、そこには無量の本因本果があるので、その無量の五百億塵点劫を束ね、一つの五百億塵点劫としたものが法華経には説かれていて、報身仏の本因妙の始めとは始めでありかつ断絶の無いものであるとする。即ち断絶の無い無量の本因本果をもつ故に報身仏は久遠無始である、と述べられている。『法華宗本門弘経抄』にもこの断絶の無い本因本果の説明があり、

久遠と云ふは事に約して之を論ず、故に久遠と云ふは報応にこれあり：譬に五百塵数を取る、所譬は報身の久遠なり：自行の因果の本因本果を第一番の成道と名く、此の自行の因果は無始久遠なり⁽⁵⁵⁾

として、まず久遠とは実事を論ずるので報身・応身に当てはまるのであって、五百塵点とは報身の久遠を譬えたものである。即ち五百塵点は報身仏の因果所修の時間であり、自行の因果は無始久遠であるとする。更に、

本因妙已前に無量無辺の積尊上行師弟自体顕照の自受法楽の説法これありと雖も、自行の成道なれば名体も替らず唯是れ積尊上行の一仏一菩薩の本因本果なり、故に能譬の五百塵数も本因妙已前に無量無辺の五百塵数これあるべし、其の中の一箇の五百塵数を経に挙げたるなり、実には本因妙已前に無始久遠の五百微塵これあり、随つて無量無数不可説の本因妙積尊上行の出現これあり、故に無始の久遠と云うなり⁽⁵⁶⁾

として、本因妙以前には無量無辺の積尊・上行が出現し、各々師弟として自受法楽の説法があるが、これは積尊・上行の一仏一菩薩による自行の本因本果である。よつて譬えである五百塵点も、本因妙以前には無量無辺の五百塵点があり、其の中の一箇の五百塵点を経に挙げているとする。従つて実際には本因妙以前に無量無辺の五

百塵点があり、それ同等の釈尊・上行の出現があるので無始の久遠というのである、と述べられている。

要するに、師である無量の釈尊と、弟子である無量の上行が現れて菩薩行を行うので、因果所修の時間である五百億塵点劫も際限の無い無量の五百億塵点劫となり無始無終となるのであって、法華経に説かれる五百塵点とはこれを一つの五百塵点で代表したとするのである。

更に、この無量の釈尊・上行による成道は「自行の本因本果」であると述べられているが、これはどういうことかを理解するには釈尊と上行の関係を確認する必要がある。『法華宗本門弘経抄』には、

本果釈尊自体顕照の九法界の本因妙は上行なり、故に一身同体の本果より本因に下り、釈尊の御身を上行菩薩となして本因妙の観心経を以て上行に付す、故に滅後観心の教主は上行なり。⁵⁷⁾

として、本果釈尊と本因妙上行は同体であり、釈尊はその身を上行菩薩として上行に付嘱する。また『開迹顕本宗要集』には、

本行菩薩道時より已前過去の過去…不可説の釈尊、上行の出世之れあり。是れ皆本時自行唯與円合の自行成道なる故に…唯釈尊、上行ばかりなり。故に無量無辺の釈尊を以て本果釈尊一仏と為し、不可説無量の上行等を以て本因妙上行と為す。故に釈尊も本行菩薩道の本因妙の時は地涌の菩薩上行等なり。⁵⁸⁾

として、本因妙以前の過去には数え切れない釈尊と上行の出現があり、本因妙上行の成道は釈尊上行同体であるので自行による成道である。この無量無辺の釈尊・上行を以って本果釈尊・本因妙上行とするため、釈尊も本因妙の時は地涌の菩薩上行等である、と述べられている。

まとめると、釈尊を師として弟子の上行が菩薩行を行うのだが、その師である釈尊もそれ以前に菩薩行を修した上行なのである。この「果」である釈尊と「因」である上行は一体であるので、成道は全て自行によるもの

あるから、この因果は無量無辺となるのである。よって因果所修の時間である五百億塵点劫も際限の無い無量の五百億塵点劫であるので無始無終となるのであって、法華経に説かれる五百塵点とはこれを一つの五百塵点で代表したものである、ということになる。

第二節 日隆聖人による仮説論批判と論証

日隆聖人は三五塵点を仮説とする当時の天台宗を強く批判し、五百塵点実説の立場を主張した。では何故仮説論を強く批判したのか、一般的には解釈し難い「無始無終の五百塵点」を主張したのか、その論証を確認していきたい。

『四帖抄』に、

三五墨点をば、天台宗には、塵数へと云つて仮説と云うなり。…この三五仮説ならば、本迹の法門も仮説か。…久遠成道の法門も仮説か、無用か。⁵⁹

と記している。また、『法華宗本門弘経抄』にて、

天台の末学は上件の三五塵数の顕本の深義に迷惑し仮説と云ふこと、以ての外の大僻見なり⁶⁰

とあるように、当時の天台宗は三五塵点を仮説とみていたことが知られる。これに対して日隆聖人は、三五塵点を仮説とするならば本迹や久遠成道といった法門も仮説かと述べ、仮説は謬りであると強く批判されている。

つまり、当時の天台宗が三五塵点を仮説とするのに対して、日隆聖人は、三五塵点は実際に経過した時間であり、三五塵点の実説であるとみている。

『四帖抄』に、

妙樂は、諸經と法華經とを相對して、諸經にこれなき希有の法門を「略して十双あり」とて二十箇条これを
釈す：三五の微塵を事希とも不説とも称歎する處は、三五の塵数は先代未聞の重宝と聞えたり。何ぞ仮説と
謗すべけんや。最第一の実説なり。⁽⁶¹⁾

として、諸經と法華經を比較し、三五塵点は前代未聞の重宝であるとする妙樂大師の立場を支持し、三五塵点は
実説であると述べている。では三五塵点は何故、諸經に説かれない稀有の法門であるのかというと、『四帖抄』
に、

三五の塵数は仮説と云う事を近來の学者云い出だして謗法を起す事、不便の次第なり。若し仮説と云つて塵
数を失うは、諸經並びに迹門にも久遠と云う言はこれありと雖も、但だ久遠と云えば、諸經と法華經とこれ
同じ。故にこの久遠に事相の譬を相い副えて、久しく遠き數量を事に数え立てて、迹門大通の久遠なるを、
事に数うれば三千墨点なり。過去本地法華經の久遠なるを譬をもつて、事に数え顯さば五百微塵なり。⁽⁶²⁾

として、三五塵点を仮説とみなすことは謗法であり、爾前諸經と法華經とを同じとするものである、としている。
諸經や迹門にも久遠という文はあり、ただ久遠と言えは諸經と法華經は同じとなるが、久遠という事実に対し、
譬えを添えて數量を数え立てているのが三五塵点である、と述べられている。更に、

若し仮説とて塵数なしと云うは、塵数の事本即ち転じて、迹中法身の理本と成つて体用本迹の本に同ず。寿
量品の本門と諸經の実相法身と同共して：本門と尔前と有同有異して：諸經一致の法門出来して大謗法と
成つて、無間に墮すべきなり。⁽⁶³⁾

として、仮説とした場合、理法身正意となつて諸經との勝劣がなくなり、法華經を含む全ての諸經が一致となる。
即ち、法華經は諸經に対する超勝性を失うこととなる、と述べられている。

ではなぜ法身正意となると諸経との勝劣がなくなるのであろうか。この点については、

大日は非因非果の法身なり。…本末を論ぜず。…法身をば、記の九に「法身の非寿は諸経の常談」と云いて、一代諸部の円並に寿量品の通釈まで、通じて希有ならざる法門なり。但だ、一代諸経に秀でたる希有甚深の法門は、本門寿量品の久遠の報身、三五の塵数の本迹なり。…この報身をもって三世を見れば、三世の慈父は久遠の報身なり。而も本因・本果を備え…三世の衆生に種・熟・脱の本尊となる。⁶⁴

として、「法身の非寿は諸経の常談」との文を引いて、法身には因果が無く非始非終であることは諸経に説かれており、稀有ではない法門であるとする。法華経の超勝性は、三五塵点の本迹、特に五百塵点を経た久遠の報身を説くことにあり、この報身こそ本因本果を備え、三世に亘って衆生に三益をもたらす本尊である、と述べられている。さらに『四帖抄』には、

この三五の微塵は、久遠報身の三世益物の利生は諸仏近成の利生に勝る事を称歎する時、この三五の塵数を出して、その証拠に備うるなり。…三世の中に過去をもつて諸の仏法の初めとなす。…初めは下種なり。

…この根本の初めより第二番に迹を垂る。根本の初めは一仏乗にして、一法・一仏・一菩薩・一衆生・一国土なり。この大法を真言・念仏・華嚴になきことを顕さんがために、五百微塵の事の譬を設くるなり。⁶⁵

として、報身仏の三世益物は諸経に説く諸仏に勝るのであり、その証拠として三五塵点を説くものであるとする。あらゆる仏法の根本を辿れば、久遠過去世に報身仏が下種を受けたことが最初であって、一切衆生を成仏の道へ導くことがその根本にはある。よつて第二番以降の諸仏は迹仏に過ぎず、全て久遠本仏に帰因することが法華経には説かれている。即ち、法身仏ではなく報身仏にこそ法華経の超勝性が存すると言え、爾前諸経に説かれていない事を顕すため五百塵点の譬えを設けた、という事が確認できる。

以上見てきた通り、もし五百塵点が仮説で理法身が正意であるとした場合、法身には因果が無く非始非終であることは諸経に説かれているため、法華経は諸経に対する超勝性を失う。法華経に説かれる報身仏の三世益物が諸経の諸仏に勝る証拠として三五塵点の譬えがある。よって日隆聖人は仮説論を強く批判して五百塵点実説の立場をとり、本因本果を備える報身仏こそ正意であることを強く主張したものであるといえる。

第四章 五百塵点と無始無終の整合性について

第一節 五百塵点の譬えに関する考察

前章にて日隆聖人における五百塵点の解釈について確認した。即ち、釈尊を師として弟子上行が菩薩行を行うが、師である釈尊もそれ以前に菩薩行を修した上行であるとする。従って「果」である釈尊と「因」である上行は一体であるので成道は全て自行によるものとなり、この本因本果は無量無辺となる。よって因果所修の時間である五百億塵点劫も際限の無い無量の五百億塵点劫であるので無始無終となり、法華経に説かれる五百塵点とはこれを一つの五百塵点で代表したものとす。これは無始無終の菩薩行を示しており、実修実証の報身仏こそが我等衆生の手本、本尊であるといえる。

では、日隆聖人は何故一見すると繰返しとも受け取れるこのような際限の無い本因本果、無始無終の五百塵点を主張されたのであろうか。「繰返し顕本」と批判する先行研究の中には、有始である本因妙の当初と『一代五時鷄図』に示される報身仏の無始無終との会通を試み、苦慮した結果、自行の本因本果による無始無終の五百塵点を主張したとの見解もあるが、今節では日隆聖人がこのように考えられた論拠が奈辺にあるのかについて、考

察していききたいと思う。

『開迹顯本宗要集』には、

報身に本因本果を具するなり。…本本と云ふ本は本来本有無始無終にして久遠なり本覚なり。故に譬の方に
も五百塵点と云ふ、五百の斎限ある方は因果の辺なり、塵点塵数の無辺なる方は本本の辺なり。⁽⁶⁷⁾

として、本因本果において「本」とは本有・無始無終・久遠・本覚である。よって五百塵点の語のうち、有限である五百は「因果」を指し、無量無辺の塵点は「本本」即ち「際限無い本因妙」を指すものとする。また『開迹顯本宗要集』には、

此れ等の諸文悉く本門正在報身の本因本果事成の顯本は久遠常住の因果なれば無始無終にして三千遍法界は
因、諸法実相は円満の果也と定判する其の本因本果に譬ふる五百塵点なる故に、五百と云ふも無始無終の五
百にして無量無辺不可称計の五百なり。本因本果の因果の方は五百に譬へ、本と本との久遠無始無終なる方
をば塵数の斎限なく不可称計にして弥勒も知らざる辺に譬ふるなり⁽⁶⁸⁾

として、報身の本因本果は久遠常住の因果であり、遍於法界を因、諸法実相を果とする本因本果に譬えるところ
の五百塵点であるので、五百塵点とは無量無辺で数えられない程の五百塵点であり、本因本果のうち「因果」を
五百に譬え、無始無終である「本本」（引用元は「本と本」の記載であるが統一のため本論文では「本本」と表記す
る）即ち「際限無き本因妙」を、弥勒菩薩でも数えられない塵点に譬えたとする。

これらの文で確認できるのは、本因本果において「因果」を「五百」に譬えており、無始無終である「際限無
き本因妙」を「無量の塵点」に譬えたとする説示である。

換言すれば、まず「因果」とは、久遠本仏（『釈尊』から下種された報身仏（『上行』）が菩薩行（『聞信口唱』）

を行じた結果境智冥合して仏果を得たのであるが、この菩薩行の時間を「五百」即ち五百億塵点劫に譬えたのである。一方「本本」であるが、下種をする積尊と菩薩行を行う上行が団体であるので前述の「因果」は師弟団体である一仏による自行の成道である。結果、無数の「因果」が繰り返されることとなるが、これが「際限無き本因妙」であって、この無数の繰り返しを「無量の塵点」、即ち無始無終である無量の五百億塵点劫に譬えたもの、と言えるのである。

次に日隆聖人は本因本果を「因果」と「本本」とし、「五百」と「塵点」に配分された理由について確認したい。

法華経寿量品に説かれる五百塵点の譬えを具体的に記述してみると、まず五百億那由他阿僧祇の三千世界を微塵にし、東方に進んで五百億那由他阿僧祇の世界を超えて一塵を下し、また五百億那由他阿僧祇の世界を超えて一塵を下すことを塵が無くなるまで繰り返す。一塵を下した世界と下さなかつた世界を全て塵にし、その一塵を一劫としても、久遠本仏が成道はこれよりも長い時間を経ている、というものである。

これらを鑑みると、「因果」は有限である五百億那由他阿僧祇の世界、「本本」は無量である微塵にした五百億那由他阿僧祇の三千世界にそれぞれ配分しているものと考えられる。図示すると、

塵点―無量―三千世界を微塵にしたもの―本本―積尊上行による自行の成道

五百―有限―一塵を下す間の世界の数 ―因果―報身仏の修因感果

となる。即ち、五百塵点の譬えとは、報身仏の菩薩行は五百億那由他阿僧祇の世界を超えるが如く長遠であるが有限であって、積尊・上行の自行の成道は三千世界を微塵とするかの如く無量であることを各々譬え、更に東方に向かって世界を超えて一塵を下していくかの如くに繰り返されることを譬えたのではないかと推察する。

以上、繰返しとも受け取れる際限の無い自行の本因本果、無始無終の五百塵点を日隆聖人が主張されたのは、法華經寿命品における五百塵点の譬えを事実として信解されたからこそであり、日隆聖人の無始無終の五百塵点説は法華經の教相に即したものと考える次第である。

第二節 「有限数と無始無終」の概念の考察（現代宇宙論）

以上見てきたように日隆聖人はその著述において、繰返しとも受け取れる際限の無い自行の本因本果、および無始無終の五百塵点を主張された。しかし第二章で述べたように、「有始である五百塵点」と「無限と捉えらるる無始無終」との関係性には様々な見解があり、論理的整合性において課題が残されてもいる。今節では現代宇宙論の観点から「有限数と無始無終」の概念について考察を試みたい。これらは一見相容れない概念であるが、一見有始だが無限と捉えられる例は本当に考えられないのであろうか。

大平宏龍『日蓮教学の大綱』では、「実修実証と無始無終 私見」という項目を立て、宇宙物理学者ステイブ・W・ホーキングの著書を挙げ、宇宙の始まりに関する新しい見解、即ち「宇宙は有限であって縁がない」というホーキングの説を、「実修実証と無始無終」の例として紹介されている⁶⁶。この点についてその内容に触れつつ詳しく考察してみたいと思う。

まず現代の宇宙論が変遷するきっかけとなった、時間と空間の概念の変化について確認する。現代、宇宙はある一点から始まって爆発するかのように急激に膨張し、そして宇宙は今も膨張し続けている、という概念が定説となっている。しかし古来、宇宙は静的で不変であると考えられていた。この転機はアインシュタインが発表した一九〇五年の特殊相対性理論、および一九一五年の一般相対性理論である。

特殊相対性理論とは、一定の速さで動いている全ての観測者に対して、その速さがどうであらうとも科学法則ならびに光速の値は同一であるというもので、時間は不変ではないことを明らかにした。一般相対性理論はこれを重力にも適用できるように拡張したもので、時空は平坦なものではない。物体は重力で動くのではなく、湾曲した時間と空間において、直線経路に最もよく似た経路を辿っているにすぎないとする。実験により相対性理論が正しいことが証明されると、不変と思われていた空間と時間の概念は覆された。理論検証と観察や実験で明らかになるにつれ、空間と時間は動的なものへと変わっていったのである。

次に膨張する宇宙、ビッグバン宇宙論について説明する。宇宙は今も膨張し続けているのだが、その明確な証拠は一九二九年のエドウィン・ハッブルによる銀河の観測である。ハッブルは、我々が住む銀河が唯一のではなく数多くの銀河が存在していること、更に銀河は全て互いに離れていつていて観測によって発見した。その他種々の観測結果から宇宙は膨張していると考えるのが妥当であると結論付けられることとなった。この膨張する宇宙を説明するにはどのような宇宙が考えられるかを、一般相対性理論を元に最初にモデル化したのがアレクサンデル・フリードマンで、宇宙が膨張するモデルは三種類考えられるが、

フリードマン解はすべてある一つの特徴を共通に持っている。それは過去のある時点（二〇〇億ないし二〇〇億年以前）には、隣りあう銀河の間の距離はゼロだったはずだということである。⁽⁷⁰⁾

と、そのどれもが、膨張する宇宙では全てのもは一点に集約された始まりが必ず存在することを予測するものであった。これらによって明らかにされた宇宙像とは、一点にある宇宙が始まりの時間に急激に膨張を開始し、冷えていくにつれて様々な星や銀河を形成しながら現在に至り、今なお膨張を続けているというものであった。

一方で膨張する宇宙モデルには問題がある。宇宙は体積がゼロから始まるので、密度・時空の歪みが無限大と

なる点が存在する、という点である。著者であるホーキングとロジャー・ペンローズは、一般相対性理論が正しいとすると、ビッグバンの瞬間にはあらゆる物理法則が破綻する点、いわゆる特異点が存在することを一九七〇年に予測した。更にこの時点より以前を類推することは不可能であり、時間の始まりと考えざるを得ないと述べている。

ビッグバンとわれわれが呼ぶその時点には、宇宙の密度も、時空の湾曲率も無限大だっただろう。∴一般相対性理論（フリードマン解はこれにもとづいている）が、宇宙にはこの理論自身が破綻するような一点が存在すると予測していることを意味する。⁽⁷¹⁾

ビッグバン以前のできごとからはどんな論理的帰結も導きだせないのであるから、それが科学的な宇宙モデルの一部となることはありえない。∴時間のはじまりはビッグバンにあった、と言わねばならないのである。⁽⁷²⁾つまり一般相対性理論は膨張する宇宙とよく一致する一方、宇宙の始まりは無限大の密度を持つことになり、物理法則が破綻するのでうまく記述できない。よってビッグバンの瞬間である特異点よりも過去は一般相対性理論のみでは説明できない、と述べている。

この問題点を解決するのが量子力学である。量子力学とは原子やそれを構成する素粒子の運動を記述する物理法則体系であるが、ビッグバン直後の宇宙、極めて小さい状態の宇宙では量子力学の効果が無視できなくなると予想される。量子論の基本的原理であるハイゼンベルクの不確定性原理に従えば、粒子の位置と速度は両方確定することはできず、確率をもってしか表すことはできない。つまり、

宇宙がどのように出発したかを予測するには、時間のはじまりにも成立していた法則が必要である。∴量子論では通常の科学法則が、時間の始まりも含めていたところで成立していることが可能である。量子論で

は特異点が存在する必要はない。⁽⁷³⁾

とし、量子力学に従えばある大きさ以下に位置を特定することはできないので、時間の始まりでも量子論の科学法則は成立する。よって特異点を考える必要はないと言えるのである。

ホーキングは量子論を宇宙に適用することを試みた。その結果、量子力学の効果が無視できない大きさの宇宙について考える場合、一般相対性理論が扱う時空に対して虚時間と呼ばれる尺度を用いるべきだという結論に至った。虚時間とは時間に虚数（二乗すると負になる数）を掛けたものであり、虚数は数学上の概念である。

量子力学と重力を結びつけた、完全に整合的な理論はまだない。経歴総和法を用いて量子論を定式化する：⁽⁷⁴⁾「実時間」ではなく、「虚時間」と呼ばれるものの中の、粒子経歴に対する波を加え合わせなければならないのだ。

として、宇宙の始まりを正確に記述しようとする量子力学と重力を統合させた理論が必要になるが、現代物理学において完全に整合が取れている理論はまだ存在しない。ホーキングの考えでは実際の時間の代わりに虚時間を用いることで整合性を保つ事ができる、と提唱している。何故ならば、

重力の量子論では：時間の方向が空間の方向と同じ性質をもつ：境界あるいは縁を形づくる特異点を持たないでいることが可能なのだ。⁽⁷⁵⁾

と、虚時間が成立する時空では、虚時間と空間は同じ性質を持つために区別がつかなくなる。そのため虚時間には境界がなく、特異点を持たないでいることが可能であるという。

実時間では：宇宙は非常に大きさまで膨張するが、最後には、実時間では特異点に見えるものにふたたび崩壊してしまうだろう。：特異点がなくなるのは、宇宙が虚時間を用いて描けるときにかぎられる。⁽⁷⁶⁾

我々が感じる実時間上では、宇宙は最後には特異点に収縮するが、虚時間上で見ると特異点はなくなり、実時間上での宇宙の始まり、終わりとなる点は、連続した虚時間の中のある一点となるものと考えられる。

以上、ホーキングの著書から見る現代宇宙論を確認した。まとめると、宇宙の始まりはビッグバン、即ちあらゆる物理法則が破綻する特異点から始まる。しかしそれは相対性理論のみで予測されたものであり、我々は実時間の世界にいたのでそう見えているだけであるとする。量子論との整合性を取るには虚時間の世界から見なければならず、この場合、空間と虚時間は区別できなくなつて特異点の必要はなくなる。実時間の中に見える我々には宇宙や時間には始まりと終わりがあるが、仮に虚時間の中から見れば、実時間における宇宙の始まり、終わりは、連続した虚時間の中の一点でしかなくなるのである。ホーキングはこの虚時間に関し、

境界や縁をもたないとすれば、はじまりも終わりもないことになる。¹⁷
と述べており、この虚時間こそが真の時間かもしれない、とも評している。

このように実時間から見ると宇宙は有限の始まりと終わりをもつが、虚時間から見ると宇宙は始まりも終わりもない。見る立場によつて「時間は有限であり、無始無終である」と言えるのである。これは現代科学が導き出した、一つの具体例と言えらると思うのである。

もう一つ、私見ではあるが、もし仮に現在の宇宙が終わりを迎え、新たに別の宇宙が作られるとした場合、現在の宇宙の終わりには時間と空間の区別がなくなるため、最初の宇宙とは異なる実時間の軸を持つ宇宙が形成されるのではないだろうか。つまり、一つの宇宙における実時間は終わるが、次の宇宙では実時間はその軸を変えて再び始まるとすると、これも「有限で無始無終の時間」と言えないだろうか。

日蓮聖人や日隆聖人がこのような時間の概念を持っていたということはできないが、「有始であり無始無終」

の整合性の問題に対し、現在考え得る具体例として、無視できない議論といえるのではないだろうか。

以上、本章では五百塵点と無始無終の整合性について、二つの異なる観点から考察を試みた。

まず第一節の法華経の五百塵点の譬えであるが、それ自体が「有限数の世界」と、「無量の微塵」にて譬えられている。日隆聖人の説示によればこれらは各々、報身仏の菩薩行は長遠だが有限であること、釈尊上行の自行の成道は微塵の如く無量であることを示していると考えられる。これは日隆聖人が法華経を論拠とし、譬喩を事実と信解されたからにはかならない。仮に五百塵点が無始無終の意であるならば、「無量の塵点」だけで譬えられ、「有限数の世界」の譬えは不要なはずである。これらを鑑みると日隆聖人は法華経に即した立場であり、「繰返し顕本」等との批判は正当性を欠くものではないだろうか。

次に第二節の現代宇宙論では、「有始であり無始無終」の実例として虚時間の概念を挙げた。我々が体感する実時間では宇宙は有始有終であるが、虚時間で見ると宇宙は無始無終であり、虚時間こそ科学的に破綻の無い時間の尺度である。見る立場によつて「時間は有限であり無始無終」と言える一例であると思う。更に、ある一つの宇宙が終わり次の宇宙が始まるとすると、その二つの宇宙の間では時間と空間の区別がなくなるので、二つの宇宙の時間軸は異なる（直線的ではない）と考えられる。これは時間と空間、即ち四次元の区別がつかない状態が根本にあつて、そこから様々な時間軸をもつ、有限な宇宙が生成されるとも言える。

こう見ていくと、日隆聖人の説示と現代宇宙論とは符合すると考えられるのではないだろうか。即ち、現代宇宙論では、四次元の区別が無い根本の状態があつて、そこでは虚時間が時間の実体であり無始無終である。そこから同一直線上ではない、異なる時間軸を持った有限の宇宙が形成され、生滅を無量に繰り返す。一方、日隆聖

人の説示では、本因妙の一時が根本にあつて、報身仏は無始無終（虚時間）となる。そこから無量の五百塵点（異なる時間軸を持つ宇宙）が生滅を繰り返す。このように見ていくと現代宇宙論でも説明可能な宇宙観、時間概念であつて、一概に整合性を否定することはできないと考えるのである。

むすび

本論文では三五塵点に関する問題、特に日隆聖人における五百塵点実説に関する問題について文献や論文を元に調査・考察を試みた。

結論としては、五百塵点実説の批判として「有始の五百塵点と無始無終」の矛盾や「繰返し顕本」等があるが、先行研究による複数の五百塵点の説示、直線的繰り返しの否定等から、日隆聖人の主張は日蓮聖人の考えに即したものであり、また法華経それ自体が五百塵点の譬えを「有数の世界」と「無量の微塵」にて配分していて、これを日隆聖人が論拠としたならば「無量の五百塵点」は法華経の経説に即したものとと言える。

更に、本因妙の一時が根本にあつて報身仏は無始無終となり、そこから無量の五百塵点が始まるという世界観を、現代宇宙論における無始無終の虚時間、異なる時間軸を持つ無量の宇宙で説明することは可能と考える。こう見ていくと、日隆聖人の五百塵点実説論は日蓮聖人遺文や法華経に立脚しており、具体例で示したようにその時間概念の整合性も一概に否定することはできないのである。

終わりに、本論文では日隆聖人の五百塵点実説論、ひいては無量の五百塵点と無始無終に関して、その論拠の提示と概念の具体化を試みたのであるが、日蓮聖人ならびに日隆聖人の思い描いた世界観、時間概念を明らかにしたとは言えず、あくまでもあり得る一つの例にすぎない。今回の考察を契機として、日蓮聖人ならびに日隆聖

人の宗教的世界観、本門八品の世界を正確に把握できるよう、研究を進めていきたいと思う。

注

- (1) 『大正新修大藏経』第三四卷二三三四頁 a
- (2) 立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』（以下『定遺』）身延山久遠寺、二〇〇〇年、八一―頁
- (3) 法華宗興隆学林編『法華宗全書 日隆Ⅰ』東方出版、一九九九年、一〇―三頁
- (4) 北川前肇『日蓮教学研究』平楽寺書店、一九八七年、五四―頁以下。米澤晋之助『慶林坊日隆教学の研究』山喜房仏書林、二〇一八年、二九九頁以下等。
- (5) 『定遺』八一―頁
- (6) 『定遺』九一九頁
- (7) 『定遺』七一〇～七二一頁
- (8) 『定遺』八九六頁
- (9) 『定遺』三二六頁
- (10) 『定遺』六〇一頁
- (11) 『定遺』九二二頁
- (12) 『定遺』一九〇八頁
- (13) 『定遺』七〇七頁
- (14) 『定遺』七〇七頁
- (15) 『定遺』八一―頁

三五塵点に関する一考察―五百億塵点劫実説について―（野坂教翁）

- (16) 『定遺』 一三二～一三三頁
- (17) 『定遺』 一三〇～一三一頁
- (18) 『定遺』 三〇七～三〇八頁
- (19) 『定遺』 五五三頁
- (20) 株橋日涌『観心本尊鈔講義』法華宗宗務院、一九八二年、一六五～一六六頁。ただしここでは筆者の取意による。
- (21) 『定遺』 二三四～二頁
- (22) 註(20) 一五七～一六一頁
- (23) 『定遺』 七二二頁
- (24) 註(20) 二〇頁
- (25) 北川前肇「日蓮教学における寿量本仏觀の展開」(高木豊編『日蓮とその教団第2集』平楽寺書店、一九七七年) 一一〇頁
- (26) 註(20) 五七五頁
- (27) 同前五七五～五七六頁
- (28) 同前五七九～五八〇頁
- (29) 株橋諦秀「日隆聖人の寿量本佛觀」『桂林学叢』第五号、一九六五年七月、八頁
- (30) 同前六頁
- (31) 同前七頁
- (32) 桃井日晃編『原文対訳 法華宗本門弘経抄』(以下、刊本『弘経抄』と表記する) 第九卷、御聖教刊行会、一九三二年、六二頁
- (33) 註(29) 八頁

(34) 同前八頁

(35) 同前八〜九頁

(36) 同前一二頁

(37) 立正大学日蓮教学研究所編『日蓮宗宗学全書』（以下『宗全』）第八卷、山喜房仏書林、一九六八年、一八八頁

(38) 望月歆厚「日隆聖人の顕本論について」『大崎学報』第三〇号、一九一三年九月、一四頁

(39) 執行海秀「初期宗学思想史上に於ける日隆上人の宗学」『大崎学報』第九一号、一九三七年二月、八九頁

(40) 北川前肇「慶林院日隆の顕本論について」『大崎学報』第一二九号、一九七六年二月、一四九頁。また、同「日蓮教学における顕本論」（小松邦彰・花野充道編『シリーズ日蓮 第2巻 日蓮の思想とその展開』春秋社、二〇一四年）三三三頁にも同様の論が見られる。

(41) 北川前肇「慶林院日隆の顕本論（二）」『仏教学論集』第二二号、一九七六年二月、四三〜四四頁

(42) 北川前肇「日蓮教学における時間論の展開」『法華経研究X』第一五号、一九八五年、三〇五頁

(43) 石田智清「日隆聖人研究ノート（二）五百塵点について」『桂林学叢』第二号、一九六一年四月、五頁

(44) 同前六頁

(45) 同前七頁

(46) 同前一〇頁

(47) 同前一〜一二頁

(48) 同前一二〜一三頁

(49) 同前二三頁

(50) 大平宏龍『日蓮教学の大綱―名目を考える―（五）』本門法華宗宗務院、二〇一三年、四七〜四八頁

(51) 田村芳朗「親鸞、日蓮両師における久遠仏思想の対比」『印度学仏教学研究』第一〇号、一九五七年三月、二五七

三五塵点に関する一考察―五百億塵点劫実説について―（野坂教翁）

（二五八頁）

- (52) 同前二五九頁
- (53) 『宗全』八卷一八七頁
- (54) 『宗全』八卷一八七～一八八頁
- (55) 刊本『弘經抄』第九卷二八七頁
- (56) 刊本『弘經抄』第九卷二八七頁
- (57) 刊本『弘經抄』第九卷二八五頁
- (58) 松井日宏編『日隆聖人御聖教』（以下『隆教』）第一卷、日隆聖人御聖教刊行会、一九七六年、四一五頁
- (59) 『法華宗全書 日隆1』一〇三頁
- (60) 刊本『弘經抄』第九卷一九九頁
- (61) 『法華宗全書 日隆1』一〇四頁
- (62) 『法華宗全書 日隆1』一〇七頁
- (63) 『法華宗全書 日隆1』一〇八頁
- (64) 『法華宗全書 日隆1』一〇五頁
- (65) 『法華宗全書 日隆1』一〇四～一〇五頁
- (66) 註(4) 北川前肇『日蓮教学研究』五五二頁以下
- (67) 『隆教』第一卷四〇〇～四〇一頁
- (68) 『隆教』第一卷四〇九頁
- (69) 註(50) 五〇～五三頁
- (70) ステューヴン・W・ホーキング『ホーキング、宇宙を語るービッグバンからブラックホールまでー』早川書房、

一九九五年、七九頁

(71) 同前七九頁

(72) 同前八〇頁

(73) 同前一九一～一九二頁

(74) 同前一九二頁

(75) 同前一九四頁

(76) 同前一九八～二〇〇頁

(77) 同前二〇二頁